

障害の関係論的地理学に向けて

エドワード・ホール*、ロバート・ウィルトン**
(田中 雅大*** 訳)

Edward Hall and Robert Wilton
Towards a Relational Geography of Disability
Progress in Human Geography 41(6), pp. 727-744, 2017.
Copyright ©2016 by the Authors
Reprinted by Permission of SAGE Publications, Ltd.

要旨: 本稿では、地理学における障害の研究者による新たな研究と非表象理論とのつながりを発展させる。筆者らは、非表象的思考には複雑かつ創発的な障害／健常の地理に関するわれわれの理解を進展させる潜在性がある、ということを経験論する。まず地理学内における非表象的思考の重要な側面を概観する。そして、いかにしてその視角から障害に関する地理学的研究が開始され、それにさらなる知見がもたらされたかを探る。次に、非表象理論が「健常－身体」の批判地理学のための基礎をどのように提供するかを検討することへと考えを広げる。最後に、筆者らの議論の概念的・政治的・方法的・経験的含意を振り返ることで締めくくる。

キーワード：健常－身体、生成、依存、障害、非表象理論

I はじめに

本稿では、障害〔無能力、行為不可能〕disabilityに関する地理学的研究において新たな局面が生じていることについて議論する。1990年代中盤から2000年代初頭を特徴づけた学術的運動の騒ぎが静まった一方で、多くの論者たちが、地理学における関係論的転回、特に非表象理論(Non-Representational Theory: NRT)に依拠して、障害／健常〔無／能力、行為不／可能〕dis/abilityに対する斬新なアプローチの潜在性potentialを確認し始めている(たとえば、Macpherson, 2009, 2010; Power, 2013; Stephens et al., 2015)。筆者らは、これらの展開には、複雑かつ創発的な障害の地理に関するわれわれの理解を進展させる潜在性だけでなく、「健常－身体able-body」の性質に関する広範な前提を不安定にする潜在性もある、と強く主張する。

1990年代の間、政治色の強い障害の「社会モデル」(Oliver, 1990)の登場によって、唯物論者がいうところの「社会－空間的現象」(Gleeson, 1999: 29)としての障害に置かれていた新しい世代の地理学者たちの間に、「関心を呼び起こす」ための概念的な手がかりがもたらされた(Butler, 1994; Imrie, 1996a; Gleeson, 1996; Park et al., 1998も参照)。社会モデルは、「損傷impairmentが個人にもたらす可能性のある独特な機能的限界(および受容能力capacity)と、障害の抑

圧的な社会的経験を、存在論的かつ政治的に」分離した(Gleeson, 1999: 52)。そして地理学的研究は、「障害差別主義者disablist」の建造環境、社会環境、制度環境の内にある物理的・態度的な障壁を明るみに出した(たとえば、Laws, 1994; Imrie, 1996b; Chouinard, 1997; Kitchin, 1998)。

(身体的)損傷と(社会－空間的)障害の明確な区別を描き出す「強い」社会モデルは、障害を再概念化したり政治化したりする際に強力なツールとなる、ということが地理学やより広範な社会科学において証明された。この型の社会モデルは、障害学disability studiesではいまだに存在感を誇示しているが(Shakespeare, 2014)、損傷を負った生きられる身体の多様かつ扱いづらい物質性materialityを無視してしまうことに注目が集まり、厳しい批判の対象となった(French, 1993; Shakespeare and Watson, 1995)。この批判は、慢性病(Moss and Dyck, 1996)、感情的・行動的問題(Hall, 2004)、精神的不健康(Parr, 2000, 2006)の研究においてポスト構造主義、特にアイデンティティの身体化embodimentや、アイデンティティに関する行為遂行的なperformative考え方を扱う地理学者によって取り上げられ、発展された(Butler and Parr, 1999; Hall, 2000)。

地理学者はこの理論的視角を利用して、社会環境を、(Gleeson (1999) が考えたような)損傷を負った人々にとってあらかじめ排除的・抑圧的に作られた

* ダンディー大学 人文地理学 上級講師

** マクマスター大学 地理・環境学部 教授

*** 日本学術振興会特別研究員 名古屋大学大学院環境学研究所

もの、としてではなく(多くの場合、それはそうした状態であり続けているが)、人々が自身の身体化に取り組んだりそれを振る舞ったりし、そうすることで自身と自身の周囲の両方を再/生産して変容させる状況、として理解するようになってきている。Imrie and Edwards (2007: 626) はこれを「アイデンティティと空間の再帰的な関係性」として概念化した。利用しやすい自宅に関するImrie (2004) の研究が一つの例を提供する。それは、「人々の自宅経験や自宅に帰する意味に影響を及ぼすのに身体化が重要であることを」を確認し、損傷が、「社会的な状況または設計環境settingから独立した機能、という意味を獲得」することはなく、と結論づけた(Imrie, 2004: 41)。身体化と自宅は両方とも、身体的で感情的な行為・意思・欲望の能動的な相互関係性を通じて、そのようなものとなるのである。

これらの議論は幅広い学問の展開をかなりの程度反映している。Murdoch (2006) と Massey (2005) は関係的な空間感覚relational sense of space、すなわち諸関係が構成された空間spaces as made up of relations、またそのようなものとして常に「異種混交的な諸関係の絶え間ない混ざり合いによって作られたり、作られなかったり、再び作られたりする」(Doel, 2007: 810) 空間、を論じた。この観点に立つとわれわれは、「障害の抑圧的な社会的経験」と「損傷[という]限界(および受容能力)」(Gleeson, 1999: 52) を区別することよりも、むしろ、排除的かつ/または行為可能にする配置exclusionary and/or enabling arrangementを生み出す受容能力をもつ流動的な諸関係に、身体(損傷を負ったものと負っていないもの両方)・物objects・空間が関与しているengagedことを想像できる。

同じような「関係論的転回」が批判障害学critical disability studiesの中で生じている。「損傷を負った人々と、損傷を負っていない、または社会の中で『普通』な人々との不平等な社会関係」(Thomas, 1999: 40)、というThomas (1999, 2004) の障害概念にもとづき、障害に関する複雑な、また複合的な、あるいは「薄く延ばされたlaminated」(Bhasker and Danermark, 2006: 90) 社会的関係の理解が展開されてきた(Gustavsson, 2004; Watson, 2012)。Shakespeare (2014: 73) はWilliams (1999) の先駆的で洞察に満ちた要約を引用している。「障害(…)は、生理的損傷の生物学的実在、構造的調整(すなわち行為可能化enablement/強制)、社会・文化的相互作用/詳細化elaborationの絡み合いという観点からみて、時間的にいえば、創発的な特性である」(Williams, 1999:

810)。

それゆえ障害に関する地理学的研究では関係論的思考の重要性が認められてきたのだが、本稿での筆者らのねらいは、人文地理学における関係論的思考、とくにNRTの潮流に一層密接に関わることで、さらなる議論と討論を駆り立てることである。筆者らは、非表象的思考の鍵となる要素がこれまでの障害地理学の取り組み方に異議を唱える、と主張する。それは、意味とアイデンティティを認識論的に強調することから、身体と物質的行為に存在論的な関心を寄せることへの移行だけでなく、関係の生成を強調することを支持して、静態的な——またはMacpherson (2010) が指摘する「本物のauthentic」——障害主体[障害者という主体] disabled subjectを脱中心化することも含んでいる。同時にこれらの異議申し立ては、いかにしてすべての身体が自らの日常的な地理において、またそれを通じて障害/健常者となるのか、そしてそのような生成は他にどのような方法で生じるか、ということについてこれまでとは異なる考えを持つための重要な機会を提供する。

以下では、まず地理学内における近年のNRT研究の重要な特徴を概観する。次に、いかにしてその視角から障害に関する地理学的研究が開始され、それにさらなる知見を与えたかを探る。最後の章では、障害者而非障害者の生成の区別を問題化する「依存身体dependent body」という広範な概念に対して関係論的アプローチがどれほど知見を提供できるか、を検討することへと考えを広げる。そして、障害に関する地理学的研究(およびより広範な研究)における関係論的思考の概念的・政治的・方法的・経験的含意を振り返ることで締めくくる。

II 非表象論的地理学

NRTは近年の人文地理学全般において幅広い影響力を有しており、障害地理学と重複・交差する研究分野、たとえば、高齢化の地理学(Hopkins and Pain, 2007; Andrews et al., 2013)、健康地理学(Andrews et al., 2014; Kearns, 2014)、フェミニスト地理学(Thein, 2005; Colls and Evans, 2012)の分野で議論を形成している。このアプローチの鍵となる特徴は、社会生活の基盤、および意識的な意味と意図の源泉、としての習慣=実践practice——Thrift (1996: 6) が「多種多様な行為と相互作用」と述べたもの——の重要性を強調することである。Barnett (2008: 188) が述べるようにこの理論的な移行は、「主体の身体的で情動的

な性向に焦点を当てる倫理的かつ政治的な行為主体性agencyのモデルを強く優先すること」と結びついている。この身体化された実践への注目は、われわれが自らと世界を理解するようになる方法に対する一見平凡で、慣習的で、非再帰的な実践の重要性、を示すことと関係している。さらに非表象論的アプローチでは、異種混交的な身体・物・環境の関係的な結びつきにおける、またそれを通じた、社会生活の創出——および理解——、といったような関係論的観点で実践が思い描かれる。進行的で実践的な生活の達成を前面に出すことは、特定の設計環境において身体ができる、またはできないことへの注目を可能にする。Deleuze and Guattari (1987: 257 [邦訳の中巻 p. 200]) はよく知られた文章の中でそのことを強く主張している。

一つの身体が示す情動はどのようなものか、さらにそれが当の身体を破壊する結果になろうと、あるいは身体によって情動が破壊される結果になろうと、また身体を相手に能動的影響と受動的影響をおよぼしあうようになろうと、身体と合一してさらに能力の高い一つの身体を構成することになろうと、とにかく身体が示す情動はどのようにして他の情動や、他の身体が示す情動と組み合わせるのか、あるいは組み合わせられないのかということを知らないかぎり、われわれはその身体について何一つ知ることができないのである。

Lim (2010) が説明するように、身体に何ができるかを問うことは、特定の身体にとって所与の社会的または生物学的な機能性を仮定することではなく、いかにして身体を受容能力が特定の、また絶え間なく変化する潜在性の場から現れるか、に関心を寄せる「純粹に開かれた」問いを提示することである。この潜在性の場は、そこに参加する身体が互いに触発し合う方法、そしてある出来事または所産が実際のものになるすべての方法を含んでいる、という意味で「仮想的＝潜在的virtual」である。

NRTの二つ目の重要な特徴は、社会生活の関係的実践が「合理を超えた、または合理に満たないもの」によって形成される方法に焦点を当て、「人間と非人間の多様な集まりの間の調和的または不調和的な諸関係の構成」(Anderson, 2006: 735) における感情的なものthe emotionalと情動的なものthe affectualの重要性を認識すること、である。情動affectという概念は、身体どうしが互いに「動き」、動かされる、個人を超えた受容能力を記述するために広く使用

されている (Anderson, 2006)。Dewsbury (2009: 21) は、関係的な媒体と作用力forceとしての情動にアプローチすることは次のような主体の理解を生み出す、と述べる。

〔主体は〕気分feeling、激情intensity、反応response、興奮sensationのさざ波と渦の放出、われわれがわれわれ自身と呼ぶ身体なるものに包まれて折り込まれる流れの中で、身体として囚われ、状況づけられる。それゆえ、単一の主体などというものではなく、複合的かつ創発的な、一連の潜在的主体性の数々a series of potential subjectivitiesが存在するのである。

こうした情動的関係は欲望によって駆り立てられる。実際、ドゥルーズによれば、欲望は社会の構成の中心を占めている (Probyn, 1996: 49)。プロビンが説明するように、欲望は、特定の設計環境やミリューにおいて、身体を他の身体や事物thingsとのネットワークや関係性に飛び込ませる。そうした欲望の働きは、生物学的であるだけでなく集成的で政治的でもある身体を横断して作られたり作られなかったりする。ドゥルーズによれば、欲望は(フロイト流の)一部の原初的欠如によって構築されるのではなく、むしろ、身体が動くため、物事を行うために、他の身体や事物と関係を築く欲望と関係している (Lim, 2010)。次章で示すように、こうした概念化は、障害者の身体がもつ接続や関与に対する欲望、また、そのような欲望が周縁化と排除を通じて妨げられる方法、それら両方を認識することに特に有効である (Duff, 2011も参照)。

NRTにおいては、関係の実践や、他のものを触発したりそれから触発されたりする身体を受容能力を重視することは、特定の偶然や経験に「根本から左右され」たり、それらから現れたりするもの、として主体性を理解することとも密接に関係している (Anderson and Harrison, 2010: 13を参照)。これは、主体性を生成の過程として理解することであり、McCormack (2009: 277) が、「関係の変容の動的かつ開放的な集まりとみなされる、過程にもとづく運動の存在論process-based ontology of movement」、と言い表したものを反映している。さらにいえば、主体生成subjective becoming^{訳注1}を「個人」なるものに還元する、あるいはその内部に制限することはできない。それは「自己にとっての『外側』でありつつも自己の深層構造を駆り立てる集合的な企て」(Braidotti, 2003: 51)、として理解される。

NRTは、身体化された関係的实践を通じた主体的経験の直接的＝無媒介的immediateまたは「内在的」な創造を強調するのだが、それは先述した近年の障害研究の関係論的思考との重要な類似点を有している(Thomas, 2004; Bhaskar and Danermark, 2006)。それはまた、非／障害者の身体化された経験を超越するもの、またそれらにとって先立つ状況を提供するために理解されるもの、としての「社会なるもの」の性質について根本的な疑問を投げかける。NRTにおいて社会なるものとは、「あれこれの実践的な秩序化の永続性を説明するために呼び出すことができる」(Anderson and Harrison, 2010: 18)ものではない。むしろ社会なるものは、諸実践がそれら自身を組み合わせさせて構成体を築くために反復することに依存する複数の秩序からなるもの、と理解される。ある意味では、関係的な活動に先立つ社会的秩序に対する反論は、無限の可能性と流動性の世界を提案するようにみえる。しかしAnderson and Harrison (2010)が指摘するように、社会なるものに関して関係論的な説明を適用することによって、維持されている秩序、あるいはそのような秩序から生じる悪影響や不平等が無視されるわけではない。むしろ、「実践的な達成としての社会なるものを端緒とすることで、悪影響の系統的過程がいかにして系統的になるかを考え抜く方法がもたらされる」(p. 18, 強調原文)。

Lim (2010) はドゥルーズ流の情動概念と機械論を組み合わせながら、差異と不平等が系統的になる過程をわれわれが理解する方法について洞察に満ちた議論を示す。リムは、複数のありえる結果を内包する潜在性の場合から身体ができることが出現し、そうした潜在性の場合、部分的に、以前実現した身体間の関係性を反映する「仮想的＝潜在的な記憶virtual memory」によって形成される「不純な空間impure space」である、と主張する(Groz, 2005: 97も参照)。この意味で、潜在的なものは別様に行動する可能性だけでなく、「いかにして身体は他の身体と適切に関係を持つべきか」(Lim, 2010: 2399)を示す記憶の断片——部分的に意識的／無意識的である情動の集塊——も内包する。リムが述べるように、

われわれが、身体の機能的配置を反復する可能性と、何か新しいことをする——身体とその関係性を解体してバラバラにして並べ替えられるようにする——ポテンシャルティの観点から情動について考える場合、情動の発生は問われるべき政治的問題となる(Lim, 2010: 2399)。

リムによれば、情動の政治的問題にアプローチするには、身体が他の身体と結びつくメカニズムと、その環境と結びつくメカニズムを同時に理解する必要がある。それは、個々の社会—空間的状况がもつ行為不可能にする／可能にするdisabling/enabling特徴を強調する障害研究と共鳴する。ドゥルーズによれば、身体は、社会的な機械または機械的な集合体＝動的編成assemblagesを通じて他の身体と結びついて混ざり合い、特定の組織と機能的な受容能力を生み出す。そのような機械は、欲望、すなわち物事を行うために他の身体との関係性に入り込もうとする身体の欲望によって組織化され、実行力powerを得る(Lim 2010; Probyn 1996; Anderson and MacFarlane, 2011)。これらの機械の中で特定の情動が実現されるのである。一方で、機械は反復するための受容能力を有しており、既存の情報パターンを実現する。それは、個々の身体はどれほど互いに関係し合うべきか、に関する記憶を反映し、続いて「感覚形成の習慣的回路」(Bissell, 2010: 483. Dewsby, 2011が引用)を再生産する。他方で機械には、それぞれの出来事と出会いの特異性を反映する他のつながりや情動を生産する潜在性がある。さらに機械は、新しい集合体を生み出すために破壊と再形成が可能である(Ruddick, 2012)。その新しい集合体において、またそれを通じて、新しく、かつ、あまり抑圧的でない情動が実現され、新しいかたちの生成が始まるだろう。次章で説明するように、欲望する身体が特定の集合体の中でできる、もしくはできないことに焦点を当てることは、障害主体と非障害主体の両方の「創発的」特徴をわれわれが考える方法に関して、重要な意味合いを有している。

III 障害の関係論的地理学

NRTの関係論的・物質論的アプローチは、人間(および非人間)生成human (and non-human) becomingの不完全な過程や、異なるかたちの主体生成を可能にする場・過程・経路としての偶発的なネットワークと集合体、を強調する。このように社会生活の「超個人的transpersonal」(Anderson and Harrison, 2010)または「非個人的impersonal」(Rajchman, 2001)性質への注目、身体化された個人的経験を「押しのける」危険性がある、という批判をいくつか生み出した(Thien, 2005)。しかし障害研究にとって、そのような視角の可能性は、損傷／障害という二項対立を乗り越える受容能力にあるかもしれない。むしろそ

れは、主体生成をかたちづくるために組み合わせる身体・物・空間の中で／を通じて／の間で機能する一連の作用の複数性を認識するのである。このNRTの可能性はエリザベス・グロスの作用力に関する研究(Grosz, 2005)において現れる(Colls, 2012も参照)。グロスはドゥルーズから直接引用しつつ、複数の身体を通じて、またその間で働く物質的な作用力・活動力energy・実践の認識にもとづく主体性へのアプローチについて、次のように論じる。

主体は、行為と情念passionのモード、出来事eventsの表面にある触媒的なものとみなせる。出来事、それは、主体が操作するのではなく参加するものである。出来事は歴史を生み出し、それゆえ主体が持つ可能性のあるアイデンティティであれば何でも生産する(Grosz, 2005: 88)。

ここにはJones (2009, 2014) との重要な類似点がある。ジョーンズは、流動的かつ創発的な空間概念と、時間をかけて特定の空間的秩序を構造化し、枠づけ、拡張し、制度化し、「政治、権力、立場性、意識、情性、埋め込みを通じて表現される」(Jones, 2009: 500) 作用力場を認識すること、を両立させる可能性について記した。グロスとジョーンズは両者とも、空間と主体性がどのように暫定的で創発的であるかを理解する方法を提示している。さらにグロスは、作用力は人間的な力としてではなく、むしろ人間味のないものinhumanで、人間主体による管理の上位と下位の規模で作動するものとして理解されるべきである、と明言している。作用力は「生きているものlivingかつ生きていないものnonliving、巨視的かつ微視的、人間の上位レベルかつ下位レベル」(Grosz, 2005: 190)なのである。この観点に立つと、肉体的差異は、「われわれが働かせる一方で管理はせず、上昇させることができない一方で変化の可能性に向けてわれわれを方向づける、物質的で進化的な作用力」(Grosz 2005: 89)、として理解される。以下では、このような考え方に価値を置くことの根拠を、障害／健全に関する主体生成、障害／健全者化の空間〔能力を失う／得る過程を構成する空間〕spaces of dis/ablementの関係の性質、そのような関係が実現される機械的集合体、という三つの重なり合う分野にいる地理学者たちによる近年の研究において確認する。

1. 障害／健全者になっていく

重要なことに関係論的物質論的アプローチは、他

の身体・物・空間との移り変わりの激しい関係を通じた、障害と非障害の両方の主体的経験の現れ方へと注意を向けさせる。たとえば、ビッセルによる彼自身の慢性的な痛みの経験に関する研究(Bissell, 2009)は、そのようなアプローチの一つの試みを提示している。慢性的な痛みは常に身体において、また身体を通じて経験されるが、その一方でBissell (2009)は、それは強度の集まりa set of intensitiesとみなせると説明する。

(…) 慢性的な痛みの強度が弱まれば生活に取りかかれるのだが、それは克服すべき敵ではなく、作用力との出会いにすぎないだろう。この避け難きは、「常に明るい面を見る」という一層気分を悪くする発想とは相いれず、むしろ、身体は常に特定の強度の集まり以上のものである、ということに約束する。わたしの身体は常に痛み以上のものだろう(…) (Bissell, 2009: 925-926. 強調原文)。

ビッセルの研究は主体的経験を軽視しない。むしろ主体の脱中心化を概念的に再考するとともに、身体の上・下・内部において、あるいは身体を超えて働く作用力や、主体生成を発生させる作用力を認識する。

Macpherson (2009, 2010) も、主体生成を形成するために作用力場が機能する方法について知見を提供する。マクファーソンは、視覚的損傷を負った人々の景観への関与について研究する中で、人間の身体、物質的景観、身体化された記憶、そして景観を「見る」方法に関して維持されている前提、それらの流動的な出会いを通じて人間の主体性と景観が「間物的inter-corporeally」に現れることを論じている。彼女の分析は、異なる作用力場——たとえば、気候・光・地形といった物質的な周囲の要素、ガイドと歩行者の身体の間にある情動の強度と物理的な相互作用、視覚的損傷／残存視力の性質と程度の変化、身体が景観に関わる方法についての主流の規範——が一体となって間物的な生成を形成したり抑制したりする方法を描き出す¹⁾。重要なことに、マクファーソンによれば、身体—景観関係という「行いdoing」は晴眼のガイドと視覚的損傷を負った歩行者の主体性が共に現れることco-emergenceに寄与する。このように、NRTに根差す関係論的アプローチは、「いかにしてわれわれは他者を通じて現れ、他者に対して責任を負い、他者に対して身体化された『恩義』を抱くか、を考えさせることができる」(Macpherson, 2009: 1052)。

視覚的損傷を負った高校生に関するWorth (2013)の研究によって同じようなテーマが展開されている。ワースによれば、学生は特定の教育的な設計環境を背景に、同級生や教師との密接かつ流動的な社会関係を通じて、持つべきものと持つべきでないものの経験と理解を発展させる。彼は、こうした豊富な感情と身体化を伴って障害／健全者の主体性が共に現れることを、「いかにして若者が自らを見つめるかということ、いかにして若者が他者から見つめられるかということ」(Worth, 2013: 108)の継続的な「押し引き」、として特徴づける。

最後に、障害／健全の間物体的な性質は、Smith (2012)のてんかんに関する研究において明らかにされている。スマスは、公共空間における[てんかんの]発作の予測不可能性と、自己操作の潜在的欠如に対する人々の心配をとらえているが、彼の研究は、発作の主体的経験が「目撃者と『意識を失った』人の同時かつ異なる経験」(Smith, 2012: 348)を横断して現れる過程も描いている。ある個人が意識を失う際、発作は他の人々に目撃されるにすぎず、その出来事に関する目撃者たちの説明がてんかんの主体的経験の本質をなす。Smith (2012)は、「てんかんにかかった身体を規範的＝標準的なnormative身体に対置されるものとして概念化するのではなく、すべての身体が複雑で、関係的で、間主体的なinter-subjective物体性に関わることを認識する」「ラディカルな身体政治学radical body politics」(Smith 2012: 354)、を提唱することで結論づけている。

2. 障害／健全者化の空間

同時に、NRTが空間と場所を、「出会うもの、遂行されるもの、流動的なもの」(Jones, 2009: 492)として理解することは、空間を周縁的なものか主流のものかといういずれかとして、あるいは包摂的なものか排除的なものかといういずれかとして、静態的に示すことに対する重要な異議申し立てを提起する。主流の社会・教育政策の言説では、しばしばそのような静態的な示し方がみられる(Holt, 2016b; Goodfellow, 2012)。これは喜ばしい概念的発展である。なぜなら、多くの障害者が(隔離的な雇用のような)周縁的と思われる環境に包摂されて所属する経験を自覚し、そのうえ、(主流の職場のような)包摂的で統合的であると考えられる場で周縁化に苦しんでいる(Hall, 2005)、ということがよく知られてきたからである。空間と場所の創発的性質にはつきりと注目することにより、特定の設計環境の特徴を形成・再形成する複雑な関係的配置relational configurationを前面に出

せるようになる。

Stephens et al. (2015)は、身体的損傷を負った子どもの自宅、学校、近隣の設計環境における経験に関する研究で、この点を描き出している。ステューブンスらは、特定の集合体における子どもの身体の生まれ方について考えるためにドゥルーズを直接参照し、次のように主張する。

われわれは、ある状況は多かれ少なかれ他の状況よりも包摂的である、というア・プリオリを仮定できない。(…)いかにして子どもたちが自宅、学校、近隣に関する異なる言説的文化や物理的インフラストラクチャーを知覚し、切り抜け、それらにしたがう、もしくは対抗するか、が重要である(Stephens et al., 2015: 213)。

これ以外にも、若者の教育空間の経験に関する最近の研究は、関係論的視点の重要性を描き出している。現在、グローバルノースでは、損傷を負った子どもと若者が「主流」の学校空間において、健全一身体をもつ同級生と共に授業を受ける「インクルーシブ教育」が奨励されている(Goodfellow, 2012)。この動きの一部として、学習障害や行動的／感情の問題を負った子どもたちが学習内容の一部を受けのために、分離された区域または教室を学校内に設けることが一般的なこととされている。これには、学習のための追加支援を提供するという利点、また一部の子どもたちに対して学校内の廊下や広場といった努力を要する環境challenging environmentからの「避難所」を用意する(Holt, 2010a; Holt et al., 2012)、という利点がある。しかし関係論的に考えれば、特定の教室または学校という設計環境は、教員、両親、生徒、政策立案者の特定のネットワークから生じるもの、および、掲示板、座席の並び、時間割、学習技術と授業実践、公式カリキュラムの特定の配置との関係において生じるもの、として理解できる。

このようなアプローチは、そうした空間を包摂的または排除的なものとして静態的に分類することに抵抗し、それらの空間が特定の関係的ネットワークの文脈の中で住まわれて解釈されることで自らの意味と地位の決定を可能にしていること、を認識する(Goodfellow, 2012)。同時に、Holt (2010b)が確認したように、これらの関係的に構成された空間は時間をかけて持続できるし、実際持続している。そしてそこにいる若者の主体生成を形成している。この発見は、流動的かつ関係的に可動性のある空間という考えと、時間をかけて特定の空間秩序を構造化し、

枠づけ、拡張し、制度化する作用力場を認識すること、を両立させる必要性に関するJones (2009)の幅広い議論と一致する。

3. 行為不/可能にする集合体

近年の研究は、機械的集合体が作動することによって、障害/健常者の身体がもつ行為するための受容能力body's capacity to actや、主体生成の可能性が形成・構成される方法にも注意を向けさせる。たとえばWorth (2013)とSmith (2012)は両者とも、教育的な設計環境と公共空間における主体生成を活気づける諸関係が、合意にもとづくものでも明快なものでも決してない、ということを明らかにしている。これらに限らずさまざまな空間では、「悪影響の系統的過程」(Anderson and Harrison, 2010を参照)が、(損傷を負っているか否かにかかわらず)ある特定の身体ができることを制限し、その身体が他の身体との関係性の中へ入る際の、またそのための潜在性の場を閉じる。

この論点は、障害/健常者の身体を受容能力が機械的集合体としてのフォーマルなケアシステムによって形成される方法、を検討することで描き出せる。たとえば、重度の移動性損傷significant mobility impairmentを負って生活する人と個人支援提供者personal support workerの出会いによって構成される関係的空間について考えてみよう。ある意味でこの出会いは、ある身体が——しばしば他の身体や物(ベッド、車いす、上体起こし機)と連携して——別の身体に対して、また別の身体のために何か——たとえば、着替えや入浴の手伝い——をすることを含んでいる(Munro, 2013)。同時に、この設計環境において身体が親密に共に混ざり合うco-minglingことは、複雑な、また移り変わりの激しい情動の絡み合いを生み出すこと、として理解できる。そうした親密な諸関係とそれらの内部を循環する情動は、幅広いケアの集合体の内部において、またそれによって状況づけられる。その集合体は、ケアへのアクセスを決定づける公的・私的資金によるケア供給システムの重なり合いや、提供されるケアの質と量だけでなく、有給のケア提供者の賃金と労働条件によっても構成される。

ここ数十年の間、多くの西洋諸国におけるフォーマルなケアの性質の移り変わり、とくに公的資金で賄われるケアの外部委託と規模縮小により、身体——受容者と提供者の両方——ができることを制限する関係的な状況が形成された。Lim (2010)にしたがえば、そのような[ケアの]集合体は、身体の行動

を仮定する方法についての特定の判断を——無意識的か否かにかかわらず——生み出す。「扱いづらい」または「困窮している」顧客、もしくは、「怠惰」または「無神経」な労働者に関する心情sentimentは、限られた支援時間と不安定な労働という状況の中で、主体性を「固定」して特定の情動パターンと偏見を実現するようにして増大される(Cranford and Miller, 2013)。この状況では、諸身体が混ざり合い、互いに依存し合う機会は乏しくなり、主体生成の機会は除外される。しかしそれでもわれわれは、それとは異なる集合体、すなわち適切な支援時間と安定的雇用によってケアの受容者と提供者の間に「共に存在するbeing with」関係的空間を発生させられるケアの集合体——有意義な出会いがゆっくりと進む場面unrushed moment of meaningful encounter——を想像することもできる(Cranford and Miller, 2013)。そのような関係的な設計環境は、ケアの提供と受容を通じて構成され、障害/健常者化・ジェンダー化・人種化される諸身体を横断して、またそれらの間で、他の形態の出会い、および主体生成の可能性を切り開く。

学習障害に関する近年の研究で同じことが示されている(Hall, 2013; Power, 2008, 2013)。たとえばPower (2013)は、学習障害を負った人々のためのデイセンターやグループホームのようなサービスが次第に廃止され、代わりに利用者がより広い地域のケア環境に参加して「自然なつながり」(Power, 2013: 68)を作り出すことが奨励される仕組み、に注意を引きつける(Wiesel and Bigby, 2014も参照)。日常的な場所に所属してその中で行動する人々が強調されるのは喜ばしいことであるが、Power (2013)は、その所属感容易には獲得できないと警告し、家族の一員、支援提供者、障害者自身によって有意義に、また慎重に交渉される仕事が必要であるとする。こうした専門用語ではっきりと表現されているわけではないが、パワーの関心は、人々が育むことができる諸関係の性質と範囲、それらの空間で作られ循環するような情動(たとえば、喜び、幸せ、怒り、苛立ち、恐れ)の強度、主体生成が可能になる形態、に注意を向けることとして理解されるだろう。このように考えることで、集合体としての健康・社会ケアシステムの組織化と、その集合体が「生き方を別様に創り出すcreate ways of living differently」(Lim, 2010: 2407)のために改変される方法についての重要な政治的問題が浮かび上がる。

IV 「健常－身体」の批判地理学

この本稿の実質的な最終章では、障害身体^{障害}の生成を超えて、関係性とNRTが健常－身体^{健常}の批判地理学に与えることができるものの考察へと向かう。Chouinard et al. (2010) は、障害＝無能力disabilityへの注目は能力abilityの「正常性」への不注意を意味する、と述べた。「長い間、障害者化された『他者』の抑圧を通じて健常－身体と健常－精神の特権性が再生産されることが認識されてきた一方で、それらの『健常』カテゴリーを体系的に解き明かす試みは少なかった」(p. 17)。これへの応答として、シュイナードらは三つの問いを示している。すなわち、「いかにして健常－身体性able-bodiednessと健常－精神性able-mindednessは地理的・歴史的に偶有的な構成物として生産されるのか」、「それらの生産においてどのような種類の知識・実践・空間が意味を持つのか」、「いかにしてそれらは不安定化されるのか」、である。地理学者は依然としてこれらの問いに取り組んでいないし、それらは近年の障害学においてようやく注目されるようになったにすぎない(Campbell, 2009; Goodley, 2014)。しかしそれでも、能力の批判的説明を発展させる試みは、健常中心主義ableismに対抗する取り組みや、価値ある／なきものにされた障害／健常者の身体という二項対立から開始することなく、他のかたちの主体生成の可能性を築こうとする取り組みの本質をなしている。本章では、そのような説明に基礎を与えらると思われる二つの道を確認する。第一に、健常－身体を不安定にする、または「奇妙なものにするqueer」可能性を探るために、近年の障害学における研究を参照する。第二に、健常－身体^{健常}の生成を「飢える」企てneedy endeavoursとして理解する関係的依存relational dependencyという広範な概念を発展させる。

1. 健常－身体を不安定にする

Goodley (2014) は、彼が「批判的健常中心主義アプローチcritical ableist approach」と呼ぶものを展開している。それは、「正常」で健常な自己が想像・規定される信念・価値・実践や、そのような自己が成り立つ諸関係と諸環境を理解してそれらに対抗するものである。彼は初期の著作で、彼自身が健常な自己の支配的様相だとみなすものをまとめている。すなわち、「認知的・社会的・感情的な健常さと有能さ、生物学的・心理学的な安定性、(…)聴くこと・動くこと・見ること・歩くこと、健全・自律・自己完結、

(…) 経済的な生存能力があること」(Goodley, 2011: 79)、である。批判的健常中心主義アプローチは、身体を「能力」の範囲内または範囲外にあるものとして価値づけ、判断し、認める上記の深く埋め込まれた一連の特徴に対抗する。Gleeson (1999) の唯物論的分析に同調するように、またいくつかの点で上述のChouinard et al. (2010) の第一の問いに答えるように、Goodley (2014) は能力に関するこれらの支配的概念が新自由主義の「生態系」の中で現れることを見出し、「機能的な新自由主義的自己the functioning neoliberal selfとは、健常－身体や健常－精神にされた自己のことである」(Goodley, 2014: 28)、と結論づける。健常－身体はそのようなものとして、有能・安定・自立という支配的な文化的概念に同調するのである。

上記の能力の基準をすべて満たせる人はいないし、すべての人が何らかの点で無能で、不安定で、依存であるが、そうした事態は健常－身体を不安定化させたり混乱させたりするには不十分であり、文化的支配の範疇にある。Sothorn (2007) は、クィア理論と障害学から生じた批判の融合である「クリップ理論crip theory」(McRuer, 2006) を取り上げ、それを、異性愛規範性heteronormativityと健常－身体性が相互に補強し合うことへの異議申し立てを通じて健常－身体なるものを不安定にすることができる手段、とみなす。障害者のための「セックスマニュアル」の研究においてSothorn (2007) は、そのマニュアルが、(否定されがちな)障害者のセクシュアリティを称揚する点で前向きである一方、依然として個人化(また新自由主義化)された自己管理の実践としてのセックスに焦点を当てている、と主張する。Sothorn (2007) は、そのような無批判な正常化normalizationに異議を唱える。彼はそれを、「健常中心主義と異性愛規範性という川を越えて自由主義的な包摂が約束された土地へと向かう安全な道」(Sothorn, 2007: 157) を探す欲望、とみなす。むしろ彼は、「われわれは橋を爆破しなければならない！」(Sothorn, 2007: 157) と続ける。クリップ理論は、人間になるとはいかなることか、ということに関して視野を広げることで、健常－身体化され、新自由主義的で、個人化されたセックスの正常性または自然さを不安定にする(またそれゆえに、すべての人を「窮地から救い出す」)ことができ、さらには、健常中心主義そのものの解体に貢献できる。クリップ理論的視角は、定義不可能な生まれ続ける(性的)主体性becoming subjectivitiesへとクィア理論が傾倒することに刺激を受け、「身体、文化、権力の流動的

で、交差的で、偶発的な分節化」(Elman, 2012: 318. Goodley, 2014: 38-39における引用)を認識する。すべての身体は、障害／健常の支配的な社会空間的—文化的構築の制約と状況の中にあるのだが、それでも、(他の身体や物を伴いつつ)創発的で、未完成で、関係的であり、情動と欲望の日常の実践によって形成されるのである。

Sothorn (2007) による健常—身体の「不具化crippling」と、Saldanha (2007) による白人らしさの不安定化または「異常化freaking」に関する画期的な研究には、価値ある類似点が存在する。サルダニャによれば、白人らしさの異常化は人種の増大を必然的に伴う。そのような仕方

人種が持つ活動力は、人種の違いを喜ばしい不協和音にするために、それを増大させるように仕向けられる。(…)このように人種の構成が崩れ去り、混ぜ合わさると、人種のグローバルな集合体における白人らしさの支配は弱体化される (Saldanha, 2007: 199)。

同じように、身体の大きさと形状、感覚の鋭敏さ、認知的能力、精神的状態、病気、怪我、その他の差異の移り変わりやすく多産的な多様性へと注意を引くことは、価値ある健常—身体とそれが障害者化された「他者」、という当然視された二元論をほどこすことにつながる。近年の肥満に関する研究がそのような増大の一例を提供している。Longhurst (2010) は、「肥満」になることは非常に間物的で間主体的な経験である、ということを示した。彼女の研究で登場する女性たちは、人・物・空間(たとえば、衣料店のスタッフ・椅子・更衣室)によって自らの身体が社会的に否定的な烙印を押されることについて語っている (Colls and Evans, 2014も参照)。しかし、肥満者は障害／健常の二元論の中で分類されることを嫌がる。肥満の身体は社会によって規定された言葉である「健常」(上述)ではないし、簡単には障害者として分類されない。こうして、そのような身体は障害／健常の二元論を不安定にし、代わりに、多様な体型と身体特性を持つ人々の経験や生成へとわれわれの注意を向ける。

2. 肯定的な依存概念に向けて

二つ目の道は、関係論的アプローチが「健常—身体」とその依存性に関するわれわれの理解に提示すると思われるもの、と関係している。関係論的／物質論的アプローチの中心にあるのは、身体は他の

人間／非人間の身体と関係を結ばない限り行動することができない、という理解である。ある種の関係——身体の混ざり合いと、特定の情動の強度の高まり——は、ある身体の行為能力を向上させる一方で、他の身体の活動の潜在性を制約する、または閉ざす傾向、を表しているかもしれない (Adkins, 2015: 97; Ruddick, 2012)。Fox (2002: 36) が説明するように、これらの情動的關係は本来無数に存在し、複数の作用力、すなわち「生物現象の、環境の、文化と再帰性の、そしてあらゆる生き物が持つ野心的な潜在性の」作用力を反映する。新たなつながりの数々が、身体がもつ行為するための受容能力を高める限り、それらは新たな生成の仕方を実現する潜在性を創り出す。

Dewsbury (2011) はこれらの過程の事例として、自転車と自転車乗りとの関係性を取り上げる。彼は Raunig (2010) にもとづき、自転車と自転車乗りの間の流れは強度的環境intensive environmentからできている、と説明する。そこでは、身体の混ざり合いが、「新たな様式の移動と社会的交流を個人が展開する潜在的な可能性、およびその展開が行われる領域」(Dewsbury, 2011: 151)を提供し、発生させる。自転車運転は時間をかけて繰り返されるうちに次第に習慣化し、この集合体を固定化する。そしてそうした習慣的行動を通じて、「われわれは世界の中で自らの場所を見つけ、同時に、自己言及的に自らの定義を獲得する」(Dewsbury, 2011: 151)のである。

Dewsbury (2011) の説明と、AKKAボードという重度の身体的損傷を負った人々の移動装置に関する Jonasson (2014) の研究には興味深い類似点がある²⁾。ヨナッソンによれば、移動は、障害者、ケア提供者、AKKAボード、物質的環境の混ざり合いとして「間物的」に生み出される。ヨナッソンが述べるように、ある意味では、その経験はより強く個人的な選択と自立を生み出すと考えられるが、実際には、「AKKAボードを利用者やその進行経路を用意する人から切り離すのは難しい」(Jonasson, 2014: 487)。それによって達成されるものは、協同的・暫定的・関係的に埋め込まれている。主体的経験は、人間と非人間の両方の身体が共に混ざり合うことによって形成された強度的環境を横断して現れる。

Dewsbury (2011) と Jonasson (2014) の両者が示した強度的環境の創出を依存の観点で理解する場合、(異なる種類の「支援技術」との関係において生じて)異なるかたちの主体生成の間の類似点を描き出すことが重要である。言い換えれば、そのようなアプローチは、すべての身体が行為したり主体的に生まれた

りするために他者との協調や結びつきに依存する方法、を認識するのである。筆者らは、それを認識することだけが自立／依存independenceの問題に対して批判的にアプローチする方法ではないことを認めている。ケアの倫理に関するフェミニストの研究分野は、ケアを実践的行為の集まりとしてだけでなく、人と人の関係の集まりとしてもとらえてきた（たとえば、Popke, 2006; Lawson, 2007; Cox, 2010; Atkinson et al., 2011）。しかしそれでもAtkinson et al. (2011: 570)は、相互依存を重んじるフェミニストのケアの倫理においてさえ、「依存と脆弱性は依然として否定的な意味合いを帯びており、ケアの価値を減じ続ける支配的な考え、理論的分類、主体性を再生産する」と警告する。アトキンソンらは、そのように維持されている依存概念に異議を唱える研究に取り組み続ける必要がある、と主張する。ここで筆者らは、生成の关系的性質と、すべての身体が他の人間・非人間の身体とのつながりを欲してそれに依存する程度を前面に出すことは、肯定的な依存概念として理解されると思われるものを発展させる一つの方法を提供する、と主張する。

関係的な依存状態を拡張するこの取り組みは、身体的差異の無視、または、個々の身体を受容能力と潜在性を制限する作用力の場合を理解し損ねる「普遍主義者の感受性universalist sensibility」（Torja-Kelly, 2005）、を意味するものではない（Colls, 2012）。その取り組みは、障害者の身体が、Campbell (2005)がいうところの「存在論的な耐え難きontological intolerance」に置かれ続けるメカニズムに対して慎重に目を向けることを必要とする。また、個々の身体を受容能力の変動を認識することも必要とする。こうした差異に対する注目は、Deleuze and Guattari (1987)による身体的な生成の議論においてはっきりと現れる。彼らはそこで、身体ができることはその経度と緯度によって決定される、と主張する。「経度が、一定の関係のもとにおける外延部分[extensive parts]からなっているように、緯度は、一定の受容能力のもとにおける内包的＝強度的部分[intensive parts]からなっている」（Deleuze and Guattari, 1987: 256-257、[邦訳の中巻 p. 199]）。このようにみれば、身体の性質は、それを形成する個々の(強度的)部分の複数性と、それとともに関係の中に入ることができる他の「部分」——身体・ものthings・物objects——の両方によって決定される。このアプローチは、強度的部分と受容能力の観点で身体の差異を認識する一方で、「器官の特徴は、経度とその諸関係、および緯度とその度合いから派生してくる」（Deleuze and

Guattari, 1987: 257、[邦訳の中巻 p. 200]）、という倫理的アプローチを支持しつつ、「器官と機能」の観点で生理的に身体を理解することを拒否する。こうした考え方は、「健常一身体」になっていくことの根底にある依存を障害地理学が体系的に検討するための枠組みを提供する。これは、そのような身体の窮乏性needinessの明確化と同時に、それらの関係的依存が成立して維持される場および過程としての集合体に対する批判的な注目、を含んでいる。

近年のモビリティに関する分野がそのような研究の一例を与える。Cresswell (2010, 2012)は、現代の社会生活における主要な資源としてのモビリティの重要性を強く主張した。彼によれば、モビリティという資源の差別的な配分が「社会階層の生産」（Cresswell, 2012: 651）において中心的な役割を担っている。モビリティ研究の分野は当然視された移動の形態を露わにし始めた。たとえば、ありふれたモビリティmundane mobilityに関する研究は、人々が「娯楽のために集まり、時間通りに働き、時間通りに子どもを迎えに行く」（Binnie et al., 2007: 166; Middleton, 2010も参照）ことを可能にする実践的・地理的な能力を指摘する。しかし、障害研究の分野が実際に示してきたように、「期待される支配的な『普通の』形態・能力に適合しない身体」（Andrews et al., 2012: 1928）を積極的に排除する建造環境や交通システムの状態において、すべての人がそれらの能力を発揮できるわけではない。

関係論的アプローチは、損傷を負っていない特定の身体が一見「気楽」かつ自然に移動することに批判的な注目を向ける。そして、「健常一身体の生理的規範の身体化としての可動的主体mobile subjectという概念」（Imrie, 2012: 2261. 強調は引用者）を疑う方法を提供する。むしろわれわれは、一連の依存——特定の身体の強度的能力と調和する他の人々、支援技術、義肢、交通システム、物質的環境への依存——を横断して現れるもの、としての可動的な「健常一身体化された」主体性にアプローチできる（たとえば、Imrie, 2012; Andrews et al., 2012）。

このアプローチは歩行の問題に適用する際にとくに挑発的になるかもしれない。なぜならその「単純な」行為に取り組む受容能力は、完全な人間（また完全に男性的）であること／になることを中心として理解されてきたからである（Cresswell, 2010を参照）。しかし、Ingold (2014)の優れた説明が示しているように、(人間の)歩行は多様性に富んでおり、特定の社会・文化的状況から現れる、またそれによって構成される。彼はこの考えにもとづき、次のように主

張する。「すべての人間に対して、自らが世界で生きるための条件に先立って与えられる、本質的な体形body plan」は存在しない。「習慣的に繰り返される歩行操作の過程で実際に具体化される形から切り離された人間の足または二足歩行の標準的形態は存在しない」(Ingold, 2014: 336)。さらにインゴルドの研究は、そうした習慣的に繰り返される歩行操作の関係的性質を示している。彼は、ヨーロッパに特有のタイプの歩き方が登場した経緯をたどり、それは、足の形を変えた特定の種類の人工装具(たとえば革のブーツや靴)、また、「ブーツを履いた歩行者がステップする機械stepping machineとして足を動かすために、文字通り道を開いた=舗装したpaved the way」(Ingold, 2014: 326) 特定の物質的環境の創出、それらに左右されながら成立した、と主張する。したがってこの研究は、健常一身体になっていくことに対してわれわれが光を当てる方法について有用な例を提供する。

V おわりに

本稿での筆者たちのねらいは、障害地理学における関係論的思考との関わりをさらに推進することであった。とくに、NRTの重要な特徴と障害の研究者による新たな研究との間にある明らかな概念的つながりを強調し、発展させることを試みた。一本の論文でできることは限られているが、筆者らが望むのは、そのつながりと刺激によって、この分野においてさらなる議論と討論がかき立てられることである。この結論の章では、これまでの議論から生じるいくつかの概念的・政治的・方法論的・実証的含意に注意を引きつけたい。

概念的な点でいえば、本稿において筆者らは、NRTによって社会生活の内在的物質性——他の身体・物・空間との関係において身体が「行うこと」——が強調されることで、障害と非障害の生成を考え抜く刺激的な方法が示される、ということに細心の注意を払った。同時に、このアプローチの限界と欠点も意識している。一つの例として、知ることknowingに対する行うことdoingの特権化——Barnett (2008: 89) が近年のNRT研究に見出した、前意識的な「行為の準備」としての情動的存在論的な特権化——は、主体が世界に触発され、世界の意味を理解し、世界において行為する過程としての意識的な解釈と表象の重要性から目を背ける危険性がある(Pile, 2010; Andrews et al., 2014も参照)。このことは、

特定の物質的環境や関係的な出会いにおいて特定の身体ができる、またはできないことを、障害/健常の表象が根底から形成し続けていることを踏まえると、とくに重大な問題である。たとえば交通計画に関する近年の研究は、障害者のニーズと受容能力が、物質的環境の改変を特徴づける設計要領や計画書から排除されている、あるいはそれらの中で誤って伝えられている、ということを示している(Bromley et al., 2007; Van Hoven and Elzinga, 2009; Imrie, 2012)。これらの表象は、都市の公共空間の内部で適切であるとみなされる身体の種類や移動のタイプに関する根強い仮定を具体化しており、それゆえ、不動/移動性im/mobilityが成立する場や過程としての幅広い物質的集合体を維持することに欠かせないものである。ここから一歩進み、主体生成の根底にある身体化された行為や相互作用が、密接かつ推測的に(Barnett, 2008を参照) 無数の障害/健常の表象と結びつく方法をさらに注目する必要がある。

また、NRTの関係論的視角は、障害の政治に対していくつもの異議を提起する。Macpherson (2010) が警告するように、NRTの「懐疑論的人間中心主義sceptical humanism」は、障害研究や障害者運動の実利的pragmaticで政治的な目的とは相いれないかもしれない。それらはしばしば、障害主体の「本物の」説明にもとづいている。しかし筆者らは、障害の政治を発展させて活気づけるためにこの懐疑論的人間中心主義を利用できる方法がある、と主張したい。特にNRTにおける主体の脱中心化は、政治的アクターとしての「自律的個人」を問題にしてきた近年の学習/知的障害に関する研究と重要な点でつながっている。個人の権利の枠組みの内部で機能する静態的主体という主流のイデオロギーは、確かに一部の障害者を力づけた——たとえば、高等教育における彼/彼女らの地位を要求したり、個別支援パッケージを確保したりした。しかし、障害の政治の基礎として自立と自律を重視すると、多様な障害者層diverse population of disabled peopleがもたらす身体化された受容能力の幅広さに対応し損ねる。より根本的な問題として、それは、すべての人々(障害者と非障害者の両方)は、多かれ少なかれ、行為に向けた受容能力のために人間的・非人間的他者に依存する、ということを理解し損ねる。

関係論的・物質論的アプローチは、本物の主体の代わりに、実践にもとづく障害の政治へと移行することを奨励する。これはGrosz (2005: 88) によってはっきりと示された。彼女はドゥルーズに依拠しつつ、従属させられた人々の政治的闘争は「実践の

ための闘争、実利的なもののレベルの闘争、行為act・実行do・創造makeする権利をめぐる闘争、として理解されるべきである、と主張する。またより行為可能的enablingで包摂的な社会形態を追及する際、アイデンティティから実践への移行は、障害者と多様な人間的・非人間的な他者との間にある政治的な同盟関係の性質、およびその潜在性へと目を向けさせる。

Leitner and Strunk (2014) が移民の提言運動advocacyに関する研究で説明したように、異なる集団・組織・場所・戦略の流動的な結びつきは、それ自体、複雑で政治的な集合体としてアプローチされる。そのようなアプローチは、たとえば日々の生活条件を形成するために活動する障害者、提言運動組織、家族、慈善家、支援提供者、労働組合、政府組織、その他の機構bodiesの流動的な諸関係を明らかにするうえで有用だろう。

方法論的な点でいえば、われわれが非表象的なものに分析的な注意を払う限り、それは、物質的な物の行為体としての受容能力であろうが、身体を動かす前意識的な情動であろうが、身体が特定の作用力の場の中で行為する／しない方法をとらえるために、「表象可能」で個人的な証言を集めることを超えた方法論的アプローチを要求するだろう。Macpherson (2010) によるエスノグラフィーはそのようなアプローチの優れた実例を示し、身体化された歩行実践への接近方法を提示している (Macpherson and Bleasdale, 2012; Fox and Macpherson, 2015も参照)。その他にもBigby and Wiesel (2011, 2013; Wiesel, 2013も参照) は、都市の公共空間における障害者而非障害者の相互作用的な出会いを記録するために「移動」観察法mobile observationを利用している。この研究は、語られるもの／語られないものを超えた出会いの物質性(たとえば、諸身体が互いを引きつける、または追い払う方法や、非／意図的に表情が示される方法) に関して重要な知見を提供する。さらに、主体的経験の「本物の」語りを超えた取り組みは、慣習的に「表象可能」なものの外側に置かれてきた人々にとって前向きな結果を生むかもしれない。Wiesel (2013: 2395) が述べるように、「われわれはその観察法によって、インタビューの場で自らの経験を語る事が難しいと思われるより重度の知的障害者、または複雑なコミュニケーションを必要とする人々を研究に加えることができる」。

最後に、上述の「健常一身体」に関する議論は、健常になっていく過程が暗示する知識の種類、関係的实践、社会空間を経験的に記録する方法についてわ

れわれは創造的に考える必要がある、ということを示唆する。ここには多くの方向性がありえるが、筆者らは今後の研究のために考えられる二つの手段を提案する。第一に、障害／健常の増大に関心を寄せつつ、規範的＝標準的な「健常一身体」とそれに対置される障害者の間にあるあらゆる二項対立を圧倒する身体化された経験の純然たる多様性に対して、より一層の経験的な注意を払う必要がある、と提案する。これに関連して、感情的困難 (Holt, 2010b)、慢性的で不規則な身体的疾患 (Stone et al., 2014)、肥満 (Longhurst, 2010) に関する重要な研究がすでに取り組まれているが、「健常」として理解されるようになる身体の複数性を強調する研究がさらに必要である。第二に、関係の依存に注目することで、「健常一身体」を見かけ上容易に動けるようにする特定の関係的なつながりと物質的な状況を明らかにする必要がある、と提案する。

謝辞

本稿での議論を発展させるために筆者たちを後押ししてくださったサラ・エルウッドと査読者の方々に感謝の意を表します。建設的なフィードバックを示してくださったことをありがたく思います。

注

- 1) 生物学的・生理学的・心理学的・社会-物質的・文化的なものを含む「薄く延ばされた」レベルの存在について語る点で、これはBhaskar and Danermark (2006) が概説した批判的实在論と類似している。
- 2) Jonasson (2014) はAKKAボードを、正式に電動車椅子として分類されているが、何よりもまず、伝統的な車椅子とは異なる操作システムを必要とするより重度の障害者によって使用されるもの、として特徴づけている。AKKAボードは、装置下部に取りつけられたカメラを使用しつつ、床にレイアウトされた絶縁テープに沿って走行する。ヨナソンが述べるように、装置の操作に関わるのは運転手だけではない。それは、両親、施設職員、その他のものも「創造的」過程に取り込む。

訳注

- 訳注1 主体なるものがあらかじめ存在することを暗示する“subjective being”に代わり、主体なるものの存在

論的な不安定性を強調し、あるものが主体になっていくことを示している。Ⅲ章の冒頭で登場する“human becoming”(人間生成)もそれと同様である。

文献

- Adkins, B. (2015) *Deleuze and Guattari's A Thousand Plateaus: A critical introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Anderson, B. (2006) Becoming and being hopeful: Towards a theory of affect. *Environment and Planning D: Society and Space* 24(5): 733-752. アンダーソン, B. 著, 森 正人訳 (2010) 希望の生成と現存——情動の理論に向けて. 空間・社会・地理思想 13: 75-94.
- Anderson, B and Harrison, P. (2010) *Taking-place: Non-representational theories and geography*. Farnham: Ashgate.
- Anderson, B and McFarlane, C. (2011) *Assemblage and geography*. *Area* 43(2): 124-127.
- Andrews, G., Chen, S. and Myers, S. (2014) The 'taking place' of health and wellbeing: Towards non-representational theory. *Social Science & Medicine* 108: 210-222.
- Andrews, G., Evans, J and Wiles, J. (2013) Re-spacing and re-placing gerontology: Relationality and affect. *Ageing and Society* 33(8): 1339-1373.
- Andrews, G. Hall, E., Evans, B. and Colls, R. (2012) Moving beyond walkability: On the potential of health geography. *Social Science & Medicine* 75(11): 1925-1932.
- Atkinson, S., Lawson, V. and Wiles, J. (2011) Care of the body: Spaces of practice. *Social & Cultural Geography* 12(6): 563-572.
- Barnett, C. (2008) Political affects in public space: Normative blind-spots in non-representational ontologies. *Transactions of the Institute of British Geographers* 33(2): 186-200.
- Bhaskar, R. and Danermark, B. (2006) Metatheory, interdisciplinarity and disability research: A critical realist perspective. *Scandinavian Journal of Disability Research* 8(4): 278-297.
- Bigby, C. and Wiesel, I. (2011) Encounter as a dimension of social inclusion for people with intellectual disability: Beyond and between community presence and participation. *Journal of Intellectual and Developmental Disability* 36(4): 263-267.
- Binnie, J., Edensor, T., Holloway, J., Millington, S. and Young, C. (2007) Mundane mobilities, banal travels. *Social & Cultural Geography* 8(2): 165-174.
- Bissell, D. (2009) Obdurate pains, transient intensities: Affect and the chronically pained body. *Environment and Planning A* 41(4): 911-928.
- Bissell, D. (2010). Vibrating materialities: Mobility-body-technology relations. *Area* 42(4): 479-486.
- Braidotti, R. (2002) Becoming woman: Or sexual difference revisited. *Theory, Culture & Society* 20(3): 43-64.
- Bromley, R., Matthews, D. and Thomas, C. (2007) City centre accessibility for wheelchair users. *Cities* 24(3): 229-241.
- Butler, R. (1994) Geography and the vision-impaired and blind populations. *Transactions of the Institute of British Geographers* 19(3): 366-368.
- Butler, R. and Parr, H. eds. (1999) *Mind and body spaces: Geographies of illness, impairment and disability*. London: Routledge.
- Campbell, F. (2005) Legislating disability: Negative ontologies and the government of legal identities. In *Foucault and the government of disability*, ed. S. Tremain, 108-132. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Campbell, F. (2009). *Contours of ableism: Territories, objects, disability and desire*. London: Palgrave Macmillan.
- Chouinard, V. (1997) Making space for disabling differences: Challenging ableist geographies. *Environment and Planning D: Society and Space* 15(4): 279-287.
- Chouinard, V., Hall, E. and Wilton, R. eds. (2010) *Towards enabling geographies: 'Disabled' bodies and minds in society and space*. Farnham: Ashgate.
- Colls, R. (2012) Feminism, bodily difference and nonrepresentational geographies. *Transactions of the Institute of British Geographers* 37(3): 430-445.
- Colls, R. and Evans, B. (2014) Making space for fat bodies?: A critical account of 'the obesogenic environment'. *Progress in Human Geography* 38(6): 733-753.
- Cox, R. (2010) Some problems and possibilities of caring. *Ethics, Place and Environment* 13(2): 1-18.
- Cranford, C. and Miller, D. (2013) Emotion management from the client's perspective: The case of personal home care. *Work, Employment and Society* 27(4): 785-799.
- Cresswell, T. (2010) Towards a politics of mobility. *Environment and Planning D: Society and Space* 28(1): 17-31.
- Cresswell, T. (2012) Mobilities II: Still. *Progress in Human Geography* 36(5): 645-653
- Crooks, V. (2010) Women's changing experience of the home after becoming chronically ill. In *Towards enabling geographies: 'Disabled' bodies and minds in society and space*, eds. V. Chouinard, E. Hall and R. Wilton, 45-62. Farnham: Ashgate.
- Deleuze, G. and Guattari, F. (1987) *A thousand plateaus: Capitalism and schizophrenia*. London: Continuum. ドゥルーズ, G. + ガタリ, F. 著, 宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林 寛・守中高明訳 (2010) 『千のプラトー——資本主義と分裂症上・中・下』河出書房新社.
- Dewsbury, J. D. (2009) Affect. In *International Encyclopaedia of Human Geography*, eds. R. Kitchin and N. Thrift, 20-24. Oxford: Elsevier.
- Dewsbury, J. D. (2011) The Deleuze-Guattarian assemblage: Plastic habits. *Area* 43(2): 148-153.
- Doel, M. (2007) Book review 'Post-structuralist geography: A guide to relational space', by Jonathan Murdoch. *Annals of the Association of American Geographers* 97(4): 809-810.
- Duff, C. (2011) Networks, resources and agencies: On the character and production of enabling places. *Health & Place* 17(1): 149-156.
- Elman, J. (2012) Crippling safe sex: Life goes on's queer/disabled

- alliances. *Bioethical Inquiry* 9(3): 317-326.
- Fox, N. (2002) Refracting 'health': Deleuze, Guattari and body-self. *Health: An Interdisciplinary Journal for the Social Study of Health, Illness and Medicine* 6(3): 347-363.
- Fox, A. and Macpherson, H. (2015) *Inclusive Arts Practice and Research: A Critical Manifesto*. New York: Routledge.
- French, S. (1993) Disability, impairment or something in between? In *Disabling barriers - enabling environments*, eds. J. Swain, V. Finkelstein, S. French and M. Oliver, 17-25. London: Sage in Association with The Open University.
- Gleeson, B. (1996) A geography for disabled people?. *Transactions of the Institute of British Geographers* 21(2): 387-396.
- Gleeson, B. (1999) *Geographies of Disability*. London: Routledge.
- Goodfellow, A. (2012) Looking through the learning disability lens: Inclusive education and the learning disability environment. *Children's Geographies* 10(1): 67-81.
- Goodley, D. (2011) *Disability studies: An interdisciplinary introduction*. London: Sage.
- Goodley, D. (2014) *Dis/Ability studies: Theorising disablism and ableism*. London: Routledge.
- Grosz, E. (2005) *Time travels: Feminism, nature, power*. London: Allen Unwin.
- Gustavsson, A. (2004) The role of theory in disability research: Springboard or strait-jacket. *Scandinavian Journal of Disability Research* 6(1): 55-70.
- Hall, E. (2000) Blood, brains and bone: Taking the body seriously in the geography of health and impairment. *Area* 32(1): 21-29.
- Hall, E. (2005) The entangled geographies of social exclusion/inclusion for people with learning disabilities. *Health & Place* 11(2): 107-115.
- Hall, E. (2013) Making, gifting and performing belonging: Creative arts and people with learning disabilities. *Environment and Planning A* 45(2): 244-262.
- Holt, L. (2004) Children with mind-body differences and performing (dis)ability in classroom micro-spaces. *Children's Geographies* 2(2): 219-236.
- Holt, L. (2010a) Young people's embodied social capital and performing disability. *Children's Geographies* 8(1): 25-37.
- Holt, L. (2010b) Young people with socio-emotional differences: Theorizing disability and destabilizing socioemotional norms. In *Towards enabling geographies: 'Disabled' bodies and minds in society and space*, eds. V. Chouinard, E. Hall and R. Wilton, 145-164. Farnham: Ashgate.
- Holt, L., Lea, J. and Bowlby, S. (2012) Special units for young people on the autistic spectrum in mainstream schools. *Environment and Planning A* 44(9): 2191-2206.
- Hopkins, P. and Pain, R. (2007) Geographies of age: thinking relationally. *Area* 39(3): 287-294.
- Imrie, R. (1996a) Ableist geographies, disablism spaces: Towards a reconstruction of Gollidge's 'Geography and the Disabled'. *Transactions of the Institute of British Geographers* 21(2): 397-403.
- Imrie, R. (1996b) *Disability and the city: International perspectives*. London: Paul Chapman.
- Imrie, R. (2004) Disability, embodiment and the meaning of home. *Housing Studies* 19(5): 745-763.
- Imrie, R. (2012) Auto-disabilities: The case of shared space environments. *Environment and Planning A* 44(9): 2260-2277.
- Imrie, R. and Edwards, C. (2007) The geographies of disability: Reflections on the development of a subdiscipline. *Geography Compass* 1(3): 623-640.
- Ingold, T. (2004) Culture on the ground: The world perceived through the feet. *Journal of Material Culture* 9(3): 315-340.
- Jonasson, M. (2014) The AKKA-board: Performing mobility, disability and innovation. *Disability & Society* 29(3): 477-490.
- Jones, M. (2009) Phase space: Geography, relational thinking, and beyond. *Progress in Human Geography* 33(4): 487-506.
- Jones, M. (2014) Kapoorian geographies of relationality: The baroque, topological twists, phase space in action. *Environment and Planning A* 46(11): 2585-2603.
- Kearns, R. (2014) The health in 'life's infinite doings': A response to Andrews et al. *Social Science & Medicine* 115: 147-149.
- Kitchin, R. (1998) 'Out of place', 'knowing one's place': Towards a spatialised theory of disability and social exclusion. *Disability & Society* 13(3): 343-356.
- Laws, G. (1994) Oppression, knowledge and the built environment. *Political Geography* 13(1): 7-32.
- Lawson, V. (2007) Geographies of care and responsibility. *Annals of the Association of American Geographers* 97(1): 1-11.
- Leitner, H. and Strunk, C. (2014) Assembling insurgent citizenship: Immigrant advocacy struggles in the Washington DC metropolitan area. *Urban Geography* 35(7): 943-964.
- Lim, J. (2010) Immanent politics: Thinking race and ethnicity through affect and machinism. *Environment and Planning A* 42(10): 2393-2409.
- Longhurst, R. (2010) The disabling affects of fat. In *Towards enabling geographies: 'Disabled' bodies and minds in society and space*, eds. V. Chouinard, E. Hall and R. Wilton, 199-216. Farnham: Ashgate.
- Macpherson, H. (2009) The intercorporeal emergence of landscape: Negotiating sight, blindness, and ideas of landscape in the British countryside. *Environment and Planning A* 41(5): 1042-1054.
- Macpherson, H. (2010) Non-representational approaches to body-landscape relations. *Geography Compass* 4(1): 1-13.
- Macpherson, H. and Bleasdale, M. (2012) Journeys in ink: Re-presenting the spaces of inclusive arts practice. *Cultural Geographies* 19(4): 523-534.
- McRuer, R. (2006) We were never identified: Feminism, queer theory and a disabled world. *Radical History Review* 94: 148-154.
- Massey, D. (2005) *For Space*. London: Sage. マッシー, D. 著, 森正人・伊澤高志訳 (2014) 『空間のために』月曜社.
- Middleton, J. (2010) Sense and the city: Exploring the embodied geographies of urban walking. *Social & Cultural Geography* 11(6): 575-596.

- Moss, P. and Dyck, I. (1996) Inquiry into environment and body: Women, work and chronic illness. *Environment and Planning D: Society and Space* 14(6): 737-753.
- Munro, E. (2013) 'People just need to feel important, like someone is listening': Recognising museums' community engagement programmes as spaces of care. *Geoforum* 48: 54-62.
- Murdoch, J. (2006) *Post-structuralist geography: A guide to relational space*. London: Sage.
- Oliver, M. (1990) *The Politics of Disablement*. London: Palgrave-Macmillan. オリバー, M. 著, 三島亜紀子・山岸倫子・山森 亮・横須賀俊司訳 (2006) 『障害の政治——イギリス障害学の原点』明石書店.
- Park, D., Radford, J. and Vickers, M. (1998) Disability studies in human geography. *Progress in Human Geography* 22(2): 208-233.
- Parr, H. (2000) Interpreting the 'hidden social geographies' of mental health: Ethnographies of inclusion and exclusion in semi-institutional places. *Health and Place* 6(3): 225-237.
- Parr, H. (2006) Mental health, the arts and belongings. *Transactions of the Institute of British Geographers* 31(2): 150-166.
- Pile, S. (2010) Affect and emotion in recent human geography. *Transactions of the Institute of British Geographers* 35(1): 5-20.
- Popke, J. (2006) Geography and ethics: Everyday mediations through care and consumption. *Progress in Human Geography* 30(4): 504-512.
- Power, A. (2008) Caring for independent lives: Geographies of caring for young adults with intellectual disabilities. *Social Science & Medicine* 67(5): 834-843.
- Power, A. (2013) Making space for belonging: Critical reflections on the implementation of personalized adult social care. *Social Science & Medicine* 88: 68-75.
- Probyn, E. (1996) *Outside Belongings*. London: Routledge.
- Rajchman, J. (2001) An introduction. In *Pure immanence: Essays on a life*, G. Deleuze, 7-23. Cambridge: MIT Press.
- Raunig, G. (2010) *A thousand machines*. Cambridge: MIT Press.
- Ruddick, S. (2012) Power and the problem of composition. *Dialogues in Human Geography* 2(2): 207-211.
- Saldanha, A. (2007) *Psychedelic white: Goa trance and the viscosity of race*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Shakespeare, T. (2014) *Disability rights and wrongs revisited*. London: Routledge.
- Shakespeare, T. and Watson, N. (1995) *Habeamus corpus? Sociology of the body and the issue of impairment*. Paper presented at the Quincentennial Conference on the History of Medicine, University of Aberdeen, July.
- Smith, N. (2012) Embodying brainstorms: The experiential geographies of living with epilepsy. *Social & Cultural Geography* 13(4): 339-359.
- Sothern, M. (2007) You could truly be yourself if you just weren't you: Sexuality, disabled body space, and the (neo)liberal politics of self-help. *Environment and Planning D: Society and Space* 25(1): 144-159.
- Stephens, L., Ruddick, S. and McKeever, P. (2015) Disability and Deleuze: An exploration of becoming and embodiment in children's everyday environments. *Body and Society* 21: 194-220.
- Stone, S. D., Crooks, V. and Owen, M. 2014. *Working Bodies: Chronic Illness in the Canadian Workplace*. Montreal: McGill-Queen's Press.
- Thien, D. (2005) After or beyond feeling? A consideration of affect and emotion in geography. *Area* 37(4): 450-454.
- Thrift, N. (1996) *Spatial Formations*. London: Sage.
- Thomas, C. (1999) *Female forms: Experiencing and understanding disability*. Buckingham: Open University Press.
- Thomas, C. (2004) How is disability understood? An examination of sociological approaches. *Disability & Society* 19(6): 569-583.
- Tolia-Kelly, D. (2005) Affect - an ethnocentric encounter?: Exploring the 'universality' imperative of emotional/affective geographies. *Area* 38(2): 213-217.
- Van Hoven, B. and Elzinga, M. (2009) 'Bikes are such a nuisance': Visually impaired people negotiating public space in Groningen. *European Spatial Research and Policy* 16(1): 131-144.
- Watson, N. (2012) *Researching disablement*. In *Routledge Handbook of Disability Studies*, eds. N. Watson, A. Roulstone and C. Thomas, 93-105. London: Routledge.
- Wiesel, I. and Bigby, C. (2014) Being recognised and becoming known: Encounters between people with and without intellectual disability in the public realm. *Environment and Planning A* 46(7): 1754-1769.
- Wiesel, I., Bigby, C. and Carling-Jenkins, R. (2013) 'Do you think I'm stupid?' Urban encounters between people with and without intellectual disability. *Urban Studies* 50(12): 2391-2406.
- Williams, S. (1999) Is anybody there?: Critical realism, chronic illness and the disability debate. *Sociology of Health and Illness* 21(6): 797-819.
- Worth, N. (2013) Making friends and fitting in: A sociorelational understanding of disability at school. *Social & Cultural Geography* 14(1): 103-123.

訳者あとがき

本稿は障害（無能力、行為不可能）disabilityに関する地理学的研究（以下、便宜的に「障害地理学」と表記する）の理論的な面での発展を目指したものである。必要となる予備知識の多さも相まって、とても難解な内容になっているが、身体・精神をめぐる問題に関心を抱く人、あるいは人文社会科学の関係論的転回やポスト人間中心主義といったものに興味がある人にとっては、間違いなく重要な論文である。

まず、本稿原文の末尾に記載されているプロフィールをもとに、著者二人について紹介しておきたい。筆頭著者のエドワード・ホールは、障害、ケア、社会的排除・包摂といったテーマを専門とし、特に学習障害者（学習障害と共にいる人々）people with learning disabilitiesに焦点を当てながら、人文地理学的観点で身体・精神・知能に関わる問題について幅広く研究している。近年では、創造芸術creative artsと所属belonging、

地域密着型支援・ケア、障害に関わるヘイトクライム(憎悪犯罪)について研究しているという。

共著者のロバート・ウィルトンも同じように、人文地理学の立場から障害、ケア、社会的排除・包摂を研究している。彼が特に注目するのは、障害、精神的不健康、薬物依存と共に暮らす人々people living with disability, mental ill health and addictionである。近年の研究テーマは、社会的企業social enterpriseが精神的不健康と共に暮らす人々の雇用を「可能にする空間enabling spaces」をどのくらい創り出せるか、であるという。

ホールとウィルトンはいずれも長年にわたり障害をめぐる問題に取り組んでおり、2010年にはヴェラ・シュイナードと共に*Towards Enabling Geographies: 'Disabled' Bodies and Minds in Society and Space* (Ashgate)という論文集を編集している。本稿はこの論文集を発展させた内容になっている。本稿を理解するには、*Towards Enabling Geographies*が発表されるまでの障害地理学の流れをある程度理解しておく必要がある。

大雑把にいえれば、これまでの障害地理学は、①身体・精神・知能に何らかの損傷impairmentを負った人々が抱える生活上の問題などを検討し、治療・リハビリ・支援技術などによってそれを解決しようとする医学地理学的または行動地理学的研究、②損傷を負った人々に対する差別や、そうした人々の排除を空間や場所に関わる問題として捉え、社会変革によってその解消を目指す社会・文化地理学的研究、の二つに大別される。障害学の言葉を使えば、①は障害の医学・個人モデル、②は障害の社会モデルといえる。

医学・個人モデルが損傷と障害をほぼ同義に捉える、つまり損傷を負うと必然的に行為不可能になると暗黙裡に仮定しているのに対し、社会モデルは損傷と障害を区別し、損傷を理由に差別されたり排除されたりすることを障害とみなす。損傷を負ったとしてもそれを受け入れる環境があれば障害者にはならない、といったような考え方であり、バリアフリー、ユニバーサルデザイン、インクルーシブ教育、差別禁止(解消)法などの根拠となっている。もともと医学・個人モデルが主流であったが、世界各地で障害者運動が巻き起こり、障害学という学問分野が誕生したことで、地理学でも徐々に社会モデルの研究が目されるようになった。本稿の冒頭で「1990年代中盤から2000年代初頭を特徴づけた学術的運動の騒ぎ」という一文が出てくるが、それはこうした①から②への移行をめぐる動きを指している。

上記②のタイプの研究が増えるにつれて、その問題点も浮かび上がってきた。障害学において特に大きな問題とされたのは、社会モデルを通じて損傷と障害が明確に区別されたことである。本稿の表現を使えば、「(身体的) 損傷と(社会-空間的) 障害の明確な区別を描き出す『強い』社会モデル」は、同時に、社会/個人、空間・場所/身体、公/私、表象/物質という区別をつくり、それぞれの前者に目を向け、後者を軽視してしまっている。そうしたことが「騒ぎ」の中で指摘された。これらの二元論を乗り越えることが「騒ぎ」が静まった後の障害地理学の課題であり、それに取り組んだのが本稿である。

訳者が理解した限り、本稿の要点は次の4つであると思われる。①障害地理学を人文地理学(あるいは人文社会科学)の

関係論的転回に位置づける。②関係論的思考の一つである非表象理論とのつながりを明確化し、障害地理学を発展させる。③それによって障害/健常という二元論を乗り越えることができる。④また従来否定的に捉えられていた依存という概念を肯定的なものとして理解できるようになる。

これもまた大雑把にいえれば、本稿で示される関係論的思考とは、「障害」や「健常」なるものをあらかじめ定義したり、それらがあらかじめ存在すると仮定したりするのではなく、異種混交的な「ものthings」の諸関係の中でそれらが生じる(創発する、発生する、出現する)と考えることである。障害も健常も、損傷の有無や人間の認識・意識などによって決まるのではなく、さまざまなもの(人・モノ・考え・制度・慣習等々)が関係し合う中でその都度立ち上がってくる、と考えるのである。本稿第III章第1節のタイトルが示すように、「障害者であるbeing disabled」ではなく、諸関係を通じて「障害/健常者になっていくbecoming dis/abled」のである。

本稿ではdisabilityにスラッシュを入れたdis/abilityという語が使われている。これは障害学者のダン・グッドリーが使用した言葉であり、disabilityとabilityが明確に区別できないことを示している。本稿の後半で紹介されるように、グッドリーは「人間」であるためには健常でなければならないという健常中心主義社会に関心を寄せる。彼は健常なるものを批判しつつ障害について考え、それを通じて21世紀における「人間」に迫る。それにあたり彼が依拠するのがフェミニスト哲学者ロージ・プライドッティのポストヒューマン論である。近年グッドリーは、プライドッティの議論に依拠しながらポストヒューマン障害学を提唱している。ホールとウィルトンは単に障害地理学を発展させるのではなく、こうした「人間」なるものを見直すポスト人間中心主義、あるいはmore-than-humanと呼ばれる動きの中に障害地理学を参入させようとしているようにも見える。

付記

本稿の作成にあたっては、2019年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費、課題番号17J03406)を使用した。また、地理学分野で障害関連の研究に取り組んでいる方々から、折に触れてさまざまな助言をいただいた。末筆ではあるが、翻訳に関わったすべての方々に感謝の意を申し上げる。